

木下順治という方がおられました。劇作家の木下順二と同姓同名ですが、別人物です。もうすでにお亡くなりになっておられるのですが、牧師であり、かつ優れた聖書の研究者でありました。この方が今からもう30年以上も前に、「パウロ 回心の伝道者」という本を出されました。それは難しい研究書ではなく、一般向けの本で、一般の出版社から出た本でした。出てしばらくしてから、何人かの牧師から勧められて読み始め、驚きました。とても大胆な仮説に立って話を進めているからです。それは、パウロという人が生前のイエスに出会っている、という仮説です。しかもそれはパウロがエルサレムに学びに行っているとき、十字架にかかるイエス・キリストに出会った、と木下さんは推論するのです。

パウロは十字架を見上げ、人々を騒がせた男、偽の救い主と人々が噂しているイエスの最後に立ち会う。そして十字架上の主イエスの言葉を自分の耳で聞くのです。これは木下さんの推論です。しかも学者の間ではほとんど取り上げられない。なぜなら、これはあくまでも木下さんの想像の域を出ないものだからです。しかしとにかく面白い。ぐいぐいと引きつけていく。

「十字架の言葉は、滅び行くものには愚かであるが、救いに与るわたしたちには神の力である。」とか、「目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示されたではないか。」というパウロの言葉は、十字架を目撃した人の言葉であって、それ以外ではない、と木下さんは言う。

パウロが十字架の下で聞いた言葉は、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」という言葉だった、というのです。パウロはこの言葉を十字架のもとで聞いた時、怒りがこみ上げてきた。なぜなら、律法という神の意思を忠実に行っている自分たちの罪を赦してくれ、というのだから。つまりわたしたちは罪人、ということになる。なぜわたしたちがこんな律法によって裁かれ、神に呪われて十字架にかかっていく男から、罪人扱いされなければならないのか、パウロは十字架の言葉に対して激しく怒る。しかし、この言葉はパウロに突き刺さり、激怒だけでなく、戸惑いや、逡巡を与え、深く深くパウロの魂に入り込み、彼を悩ませ、揺さぶり、この言葉から離れなくさせたというのです。そしてパウロはダマスコ途上で主イエス・キリストの呼びかける声を聞く。「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか。」パウロは

この声を聞く中で、十字架の上のキリストの言葉にさらに掴まれていく。パウロは自分のことを罪人とされたことに大きなショックを受けながらも、尚その罪人のために自分が裁くのではなく、自らその罪を負い、かつ神にその罪の赦しを祈り、十字架で罪の罰を受けて死んでいく、このイエスの愛に出会う。このキリストの愛こそが、律法の奥にあるものではないか、ということに気づいていく。木下さんは、その気づきこそ回心だったのではないか、というのです。まことに興味深い読みです。そしてわかりやすい。

想像や推論を交えつつも、パウロの回心の中身に迫ろうとしていることがよく伝わってくる。そして、自分も福音に与ろうとする思いが伝わってきます。

おそらくこうした推論とか、想像を交えた解釈が生まれていくという自体、パウロの回心をめぐって、劇的な変化に対して、聖書の記述があまりに簡潔、ということがあるのだと思います。だからこそ、それを何とか説明したい、筋を通して読めるようにしたい、という欲求があるのでしょう。

木下さんがパウロの回心を自分なりに解釈した、説きあかした。それはよくわかる。しかし、聖書は回心のいきさつや、筋道を語ろうとはしていない。

使徒言行録がここで語っているのは、回心ということは神からの呼びかけにおいて起こった、ということです。キリストの声がその人の中に突き刺さってきた、ということです。聞いた側の人間の中でどんなドラマが起こったのか、それを克明に書き記すことは、本人も含め、できないことですし、またそのことにそれほど意味があるわけではない。パウロ自身、自分の回心体験をほとんど書いていない。回心というものが、どういう心理状態のときに、どういう形で起こり、パウロはそれをどうとらえ、変化していったのか。聖書はそのことに関心を向けていない。

ただ、神の言葉が、キリストの言葉が、その人に向かって語られた、ということです。しかも、パウロに対して、「起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」とキリストは言われた。つまり先のことはわからないままに、言葉によってパウロは歩き出すことになったということです。かつパウロは目が一時的にせよ見えなくなっていた。なにかがよくわかって歩み始めたのではなかった、暗闇の中を歩きだしていった、ということです。声が与えられ、その声が以後もパウロに与えられ続けていった、ということこそが重要なことなのです。回心という神が起こされるドラマにおいても、われわれは人間の劇的変化、ということよりも、もっとまなざしを向けなくてはならないことがある、ということです。

パウロはキリストの言葉に聞き、聖霊を受け、洗礼を受けた後、ダマスコの町でイエス・キリストを宣べ伝え始めました。これを聞いた人々は、当然、目を丸くして驚いた。「あいつはエルサレムでキリスト者を追いかけて、迫害していたその張本人ではないか。ここに来たのも、キリスト者を縛り上げ、祭司長のところに連行するためだろう。」人々が言ったことは、当然すぎるほど当然のこと。ダマスコにキリスト者がどれほどいたのか、わかりませんが、キリスト者にとってパウロという人物は、恐怖の人物です。思うことすら嫌な人物です。その人物が、迫害をやめた、というだけでも驚きなのに、よりによってイエス・キリストを宣べ伝えているのです。啞然とした、のではないのでしょうか。開いた口が塞がらない。

しかしパウロはただイエス・キリストを宣べ伝え、論証していきます。

パウロのキリスト教への寝返りを知って、パウロを殺害しようとするユダヤ人たちも出てきました。それもまた当然といえば当然です。これまで一緒に働いてきたユダヤ教徒にすれば、パウロの回心は許せないことであり、あつてはならないことだったでしょう。

ダマスコの町ではパウロを殺そうと見張る者もいて、パウロは夜に籠に乗って町の城壁伝いにつり降ろされて行動したことも描かれています。

やがてパウロは、時を経て、エルサレムに行きます。それはエルサレムのキリスト者、キリスト教会に挨拶をするとともに、その交わりの中に入れていただくためのものだったでしょう。しかしそこでのキリスト者の態度も基本的にはダマスコと同じでした。パウロをキリストの弟子だとは認められず、迫害者としておそれた、というのです。しかし、わたしたちが普通に考えても、それはそうだろうな、と思うのです。回心後のパウロの周囲の人々の反応は、いかにパウロの変化ということが受け入れ難かった、ということの証左のようなものです。無理もない。この変化は、劇的すぎる。しかも単なる変化ではない。自分がこれまで必死に攻撃していたものを、今度は自分がイエスこそ救い主なのだ、と宣べ伝え始めたのですから。

しかし、ここには、神の働きがある、ということをおわたしたちは腹を据えて受け取る必要がある。ダマスコでも、エルサレムでも人々は、パウロの回心による変化を受けとめられなかった。それはキリスト者がです。キリスト者も、神が働いて、回心という出来事を起こしてくださる、ということを受けとめそこなっているのです。繰り返しますが、回心ということはどういうドラマがその人の内面で起こったのか、それを説明し解き明かして、ああそういうことだったのか、ということは、人間を見すぎている、ということなのかもしれませ

ん。大事なのはそのことではなく、神の働きを仰ぎ見る、ということ、キリストの言葉がその人に与えられ、与えられ続けていく、ということ。そこでどうい変化が起こるか、ということは神さまの領域、ということなのではないか。だから。パウロは各地で自分はどのように回心したか、という話をして回ったわけではない。ただ、キリストを宣べ伝えていくのです。神から託された使命に生きることに全力を傾けるのです。

エルサレムではバルナバ、という協力者が現れます。この人は4章のところで出てきた人で、「慰めの子」と呼ばれたほどの人で、おだやかで、誠実な人だったのでしょう。パウロと同じ、ギリシア語を話すユダヤ人として、彼のことをエルサレム教会に紹介し、仲介の労をとった。それでパウロはエルサレム教会の人たちとも、交わりを持つようになっていった。だが一方で、ユダヤ人の中には、パウロに対して、殺意を持つ人たちもいた。つまりパウロの周辺には、パウロに対する反感、嫌悪、憎しみ、疑い、そうした感情の津波のようなものがあつたのです。

一人の人間が生きていく環境としてきわめて不安な、不安定な、覚束ないものがあつた。しかしパウロは、主の名によって恐れずに、大胆にキリストを宣べ伝えた。そのことをわたしたちは、受けとめていく必要がある。

パウロが、語りかけられるキリストの言葉に聞いた、ということの力がここにはあるのです。「こうして、教会ユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が語って発展し、信者の数が増えていった。」こうして、という言葉はどう受けとめるのか。それをわたしたちは思い巡らす必要がある。こうして、キリストの言葉に聞いて、その言葉を宣べ伝えていく、そのことをわたしたち一人一人も経験していかなければなりません。